

# 昭和初期の高島亀太郎(上)

——高島製糸について——

川 東 靖 弘

## 目 次

はじめに

- 1 昭和2年
- 2 昭和3年
- 3 昭和4年

## は じ め に

大正15年(1926)12月25日、大正天皇が死去し、摂政裕仁が践祚し、元号は昭和と改元されました。昭和元年はわずか1週間で、昭和は実質2年(1927)から始まりました。この年の早々、金融恐慌が勃発し、昭和は波瀾に飛んだ幕開けとなりました。昭和初期の経済界は恐慌と不況の嵐が吹き荒れ、蚕糸業も苦難の連続です。また、政界も、若槻礼次郎憲政会内閣(大正15年1月30日～昭和2年4月20日)から田中義一政友会内閣(昭和2年4月20日～4年7月2日)へ、そして浜口雄幸民政党内閣(昭和4年7月2日～6年4月14日)へと政権が目まぐるしく替わり、これまた波瀾に飛んでいます。

前稿<sup>1)</sup>では、大正期の高島亀太郎について見ましたので、今回は昭和初期(昭和2年～4年)の亀太郎について、その家業面—製糸業—を見ることにします。

昭和初期の高島製糸場の動向を見るにあたり、大正末時点における高島製糸

---

1) 拙稿「大正期の高島亀太郎について(上)(下)」『松山大学論集』第10巻第2, 3号, 1998年6, 8月。

場の概要、職工の状況等（釜数、職工数、就業時間、賃金、勤続、年齢等）についてまとめておきましょう。

大正4年（1915）6月に50釜で開業した高畠製糸場は、6年に70釜、10年に100釜へと着実に規模拡大し、大戦後の恐慌・不況に際しては、技術革新で乗り越え（大正12年に煮繭器を購入し、煮繰分業、繰糸法は沈繰）、発展を遂げていました。大正13年度（製糸年度で13年6月～14年5月）における高畠製糸場は、釜数は98釜、職工数は女工110名、男工12名、計122名、煮繰は分業、繰糸法は沈繰、緒数は422、揚返窓数は76、現業員（検番員）は男3名、女1名であり、生糸は優良糸を生産し、生産高は3,450貫、生糸は全て輸出となっていました<sup>2)</sup>

高畠製糸場の職工の労働条件等について見ますと、大正末の時点で、就業時間は午前5時より午後6時までの13時間、休憩時間は1時間、休日は月2回（1日と15日）でした。明治44年（1911）3月に制定され、大正5年（1916）9月から施行された工場法では、女子の就業時間は1日12時間以内に制限されていましたが、器械製糸に従事する女子の場合には、例外規定があり、工場法施行後5年間は14時間、その後10年間は13時間まで延長することが工場法施行規則で容認されていて<sup>3)</sup>、高畠製糸場もこの例外規定にのっとり、大正末の就業時間は13時間でした。賃金形態は出来高給制と日給制との2種類があり、繰糸工女は全員出来高給で、繰糸高10匁につき一定の賃率（10匁4銭以上）を乗じ、それに、織度賞罰と糸量賞罰を加減して決められており、繰糸工女の賃金は1日最低30銭、普通90銭ぐらい、養成工女は1日15銭でした。日給者（男工と繰糸工女以外の女工）は最低30銭、普通、女子90銭、男子1円でした。

寄宿舍について見ますと、女工の大半は寄宿舍で生活し、4時半に起床し、朝5時5分前に工場に入り、午後6時まで13時間就業し、夜10時就寝という

2) 農林省農務局『第十次全国製糸工場調査』より。

3) 「工場法施行規則」第3条より。

生活のようでした<sup>4)</sup>。そして、寄宿舍は無料で、食費は1日12銭(男女共)徴収されていました<sup>5)</sup>。食事内容については、朝はご飯と漬物(沢庵)、昼はご飯と煮物又は干物又は揚げ物類(例えば、キビナゴ、ホータレ、小アジ、サバ、鰯、イリコ、豆腐、干大根、大豆、ナス、ゴボウ、ダイコン、オカラ、ヒジキ、コンニャク、テンプラ等)、夜はご飯と漬物(沢庵)という粗食でした<sup>6)</sup>。高島製糸場の発展の背景には、このような製糸工女の長時間労働、貧しい食事があり、女工には過酷のようですが、これが当時の製糸工女の一般的状況でした。

高島製糸場の職工の通勤・寄宿別の内訳や勤続年数、結婚の有無等について見ますと、高島製糸場が愛媛県警察部工場課に提出した「工場状態調査」によりますと、大正12年末現在、女工は103名いて、1人を除き全て県内人であり、寄宿女工が78名、通勤女工が25名となっており、女工の4分の3以上が寄宿舎生活でした。男工は10名おり、すべて県内人で、寄宿が6名、通勤が4名でした。勤続年数については、女工の勤続は大変短かく、勤続6月未満が29名、1年未満が30名、2年未満が26名、3年未満が12名、5年未満が3名、10年未満が3名であり、半分以上が1年未満の短期勤続となっていました。そして、1年間で解雇女工が52名、雇入女工が60名となっており、1年間で約半数の女工が交代していました。すさまじい移動ですが、これが当時の製糸工女の一般的状況でした。男工の場合は6月未満1名、1年未満4名、3年未満1名、5年未満2名、7年未満2名で、女工よりは長くなっていましたが、やはり短い勤続でした。そして、1年間で解雇が2名、雇入が5名と、やはり男工も移動が激しかったようです。結婚の有無では、女工103名中、未婚者が88名、既婚(離婚含む)が15名で、85%までが未婚者でした。なお、この調査から寄宿舎の広さもわかり、女工用は、1階が3間18坪、2階が4間24坪、男工用は2間8坪でした。1人当たりでは、女工は0.53坪、男工は1.3坪という狭さで

4) 高島製糸場の「寄宿舍規定」より。年月不明。

5) 高島製糸場の「就業案内」「就業規則」より。年月不明だが、大正末のもの。

6) 高島製糸場『献立簿』より。大正11年、12年。

した。寄宿舎の食事は、米麦の混食で米6割、麦4割、1日の食費は12銭となっていました<sup>7)</sup>

高島製糸場の職工の年齢別内訳は、さきの調査には載っておらず、高島製糸場が農商務省に提出した別の資料「軍需工業動員法ニ依ル普通工場従業者調査票」によりますと、大正12年末現在、高島製糸場の女工109名中、17歳未満が35名、17歳以上50歳未満が73名、50歳以上が1名となっていました<sup>8)</sup>。17歳以上50歳未満の内訳が不明ですが、後の資料からも大半が20歳未満であり、結婚前の若い女工によって高島製糸も支えられていたことが分かります。

以上が大正末における、高島製糸場の概要・職工の状況でした。高島製糸場は優良糸を生産し、技術革新も図り、また、本人はクリスチャンでしたが、他の製糸場と余り変わらなかったようです。

なお、工場法は大正12年(1923)3月に改正され、15年(1926)7月から改正工場法が施行され、それにより、16歳未満の者と女子の就業時間が1時間短縮され11時間となりました。ただし、器械製糸の場合には例外規定があり、5年間は1日12時間まで延長することが認められていました<sup>9)</sup>。それに伴い、高島製糸場も「就業案内」「就業規則」を改正し、1日の就業時間は、午前6時より午後6時までの12時間としました。休憩時間は1時間で変わりませんが、午前7時30分より50分までの20分間及び正午より午後0時40分までの40分間、合計1時間と明示されています。休日は月2回で、これは変更ありません。賃金は不況を反映して下がり、「就業案内」では繰糸女工の賃金は1日70銭となっていました。他方、寄宿女工の食費は少し上がり、1日15銭となっていました<sup>10)</sup>

昭和元年(1926)12月末現在における高島製糸場の概要は、愛媛県に提出し

7) 高島製糸場が愛媛県警察部工場課に提出した「工場状態調査」より。大正12年の年末現在。

8) 農商務省「軍需工業動員法ニ依ル普通工場従業者調査票」、大正12年12月末。

9) 「改正工場法施行規則」第3条より、上田四七二『改正工場法解説』大同書院、大正15年。

10) 高島製糸場の「就業案内」「就業規則」より。

た「職工員数其他届」の資料から、次のようになっていました。釜数 98 釜、揚返窓数 76 窓、大正式煮繭機 1 台、今村式乾燥機 1 台、蒸気機罐 4 個等でした。職工数は、女工が 121 名、男工が 12 名、寄宿・通勤別では、寄宿女工が 93 名、通勤女工が 28 名、寄宿男工 11 名、通勤男工 1 名で、大正 12 年末に比べ寄宿が増えていました。この資料から職工の年齢別内訳が詳細に分かり、女工 121 名中、14 歳以上 15 歳未満が 6 名、15 歳以上 16 歳未満が 5 名、16 歳以上 18 歳未満が 27 名、18 歳以上 20 歳未満が 48 名、20 歳以上が 35 名となっており、20 歳未満が 71% を占め、未婚の若い女工によって高島製糸場が支えられていたことがわかります。また、男工 12 名の場合は、15 歳以上 16 歳未満が 2 名、16 歳以上 18 歳未満が 4 名、18 歳以上 20 歳未満が 0 名、20 歳以上が 6 名でした。1 カ年の生糸の生産高と生産額は、生糸 1 万 8,000 斤 (100 斤 16 貫で、2,880 貫)、28 万 8,000 円、熨斗糸 570 貫、8,550 円、虎の尾 530 貫、1,590 円、屑繭 230 貫、600 円、合計 29 万 9,840 円でした<sup>11)</sup>

以下、昭和初期 (昭和 2 ～ 4 年) の家業面について、「亀太郎日記」を参考にしながら、高島製糸場の動向について見ることにしましょう。

## 1 昭和 2 年

3 月 14 日の衆議院予算委員会において、若槻憲政会内閣の蔵相片岡直温が東京渡辺銀行が破綻したと失言し、15 日に東京渡辺銀行、あかぢ貯蓄銀行が休業し、その後次々と京浜地方の銀行を中心に、取付騒ぎが起こり、多くの銀行が休業し、金融恐慌が始まりました (第一波金融恐慌、中井銀行、八十四銀行、村井銀行等 13 行が休業)。さらに、4 月に入り、5 日にはかねて噂のあった鈴木商店が破綻し、8 日には鈴木系の第六十五銀行 (神戸市) が休業し、13 日には、鈴木商店に多額の資金を融通していた台湾銀行がコール取り付けにあい、危機に陥り、金融危機が深まりました。それに対し、若槻憲政会内閣は台湾銀行救済のために緊急勅令で日銀の非常貸出、損失補償を行う方針を打ち出しま

11) 高島製糸場「職工員数其他届」昭和元年 12 月末現在。

したが、反憲政会の枢密院がこれを拒否したため、4月17日に若槻内閣が総辞職に追い込まれ、この政治的混乱・政治危機が金融恐慌を拡大させました。4月18日に台湾銀行が休業に追い込まれ、銀行に対する信用が崩れ、銀行への取り付け騒ぎは全国に拡大し、21日には「華族銀行」でもあった第十五銀行も休業し、金融恐慌が深まりました（第2波金融恐慌、4月中に16行が休業）。

そこで、4月20日に成立した田中義一政友会内閣（蔵相は高橋是清）は、4月22日に超非常手段として、3週間のモラトリアムを実施し（5月12日まで）、さらに、また、銀行救済のため、日銀特別融通を行いました（日本銀行特別融通及び政府による5億円の損失補償法ならびに台湾銀行への日銀の特別融通及び2億円の損失補償法）。これで漸く金融恐慌は鎮静することになりました。<sup>12)</sup>

亀太郎は機を見るに敏でした。金融恐慌期に銀行から3回も預金を引き出しています。まず1回目は4月16日です。日記に「第二十九銀行ヨリ預金ノ内、参千円ヲ当座ノ用意ニ引出シ来リナドス。東京及ビ京坂地方ニ銀行ノ休業スルモノ数カ所アリ。金融界ノ形勢不穩ナルヲ以テナリ」（「高島亀太郎日記」4月16日、以下同様）とあります。2回目は若槻内閣総辞職の4月17日です。「業用ヲナシ、又銀行ヘ金ノ引出シニ行キナドス。大阪ノ近江銀行モ休業ナルニ至リ、警戒気分濃厚ナリ」（4月17日）、そして、3回目はモラトリアムの直前の21日です。「協坂ヲ銀行ヘ遣シテ又式千円ヲ引出シ来ラシム。地方ノ銀行界ハ平穩ナルヲ以テ氣遣ヒナク、大部分ノ預金ヲ引出サレドモ、只目前ノ用意ニ備フル趣意ナリ。東京十五銀行ノ休業ニテ、全国財界ノ影響益々甚シ」（4月21日）とあります。亀太郎の用意周到な性格が伺われます。

さて、高島製糸場の動向について見ていきましょう。

高島製糸場は、昭和2年（1927）1月3日より操業を開始しています。製糸業界は前年から大変な不景気になり、悲惨な状態が続いています。生糸価格は、大正14年（1925）の暮れぐらいから下がり始め、15年（1926）一杯暴落し、そ

---

12) 高橋亀吉『大正昭和財界変動史（中巻）』549～838頁。

れが昭和2年に入っても続きます<sup>13)</sup>。その為、製糸工場の苦境も続いています。そこで、本県製糸同業組合(組合長摂津静雄)は、前年11月の蚕糸業同業組合中央界の決議に基づき、本県でも昭和2年1月31日から2月16日までの17日間、一斉に製糸業の操業休止し、生産調節を図ることになりました<sup>14)</sup>。それに伴い、高島製糸場も休業に入りました(ただし2月11日まで)。

亀太郎は、この操業休止期間を利用して、機械の修繕をしています。日記に「同業組合ノ規約ニテ繰業短縮ノ為メ、例年ヨリ旧正休ミ長キヲ以テ、此間ニ機械修繕ヲナシ置クコト、シ、過日来繰糸台ノ張替、再繰場温管ノ位置替、煮繭容器ノ修覆、濾過装置ノ手入等ヲナサシメ居レリ」(2月8日)とあります。

2月12日から高島製糸場は再び操業開始しています。帰郷していた工女が次々と工場に戻り、17日には工女が満員となっています。このころは、日記に「業用ヲナス」が続きます。

3月5日に宇和島において愛媛県製糸同業組合総会が開催されています。製糸同業組合は、重要物産同業組合法に基づき、大正2年(1913)5月に創立され、器械製糸工場や足踏製糸業主をもって組織されたものです。主たる事業は、講習講話、県外先進地の視察、製糸研究会、工男工女の表彰等で、組合の本部は八幡浜町に置かれ、組合は支部組織をとっています。支部は4ヵ所で、その区域は、第1区は、松山市、温泉郡、上浮穴郡、伊予郡、喜多郡(事務所は大洲町)、第2区は、西宇和郡、東宇和郡(事務所は八幡浜町)、第3区は、宇和島市、北宇和郡、南宇和郡(事務所は宇和島市)、第4区は、今治市、宇摩郡、新居郡、周桑郡、越智郡(事務所は西条町)となっています<sup>15)</sup>。この総会において、亀太郎は第3区の支部長に新しく選出されています。日記に「午後一時ヨリ三間屋ニ於テ開カル、製糸同業組合総会ニ出席ス。予算案ヲ議シテ後、役員改選ニ移リ、其結果組合長ハ従来ノ通り摂津静雄君重任、支部長ハ四支部共新

13) 横浜市場の百斤当たり生糸価格は、1925年12月2,014円でしたが、26年12月には1,494円に26%程暴落。27年1月以降も1,400円台に低迷。高橋亀吉『前掲書』558頁。

14) 『資料愛媛労働運動史 第6巻』144頁。

15) 大日本蚕糸界愛媛支界『愛媛県の蚕糸業』77～79頁。

任ニテ、第一区ニ杵田與三郎君、第二区ニ摂津盛徳君、第三区ハ従来ノ赤松晴雄君ニ代リテ、予、支部長ニ孰レモ当選セリ。閉会后、宴ニ移リテ、夜七時過散会、予ハ杵田君、杵山君及当地ノ村山力君ヲ玉川ニ招待シテ、二次会ヲ開キタリ。九時頃帰宅ス」(3月5日)とあります。亀太郎は、赤松晴雄(富沢町で赤松製糸場経営)に代わり、宇和島の名実共にリーダーになったわけです。

4月に、松山市において、大日本蚕糸会総会及び全国産業博覧会(城北練兵場が会場)が開催されました。亀太郎はこの会合に出席し、4月11日開催された大日本蚕糸会総会において(北予中学校で開催)で、蚕糸業功労者として表彰されています。また、この時農業学校で開催された四国連合蚕糸共進会に高畠製糸の生糸が出品され、2等賞を受賞しています。高畠製糸の生糸は優良糸であったことがわかります。

5月に入り、四国製糸株式会社南予工場(伊吹町、299釜、本社は大阪)の買収問題が持ち上がりました。四国生糸株式会社の前身は南予製糸株式会社で、本県出身の実業家で衆議院議員の今西林三郎が土居通夫、山下亀三郎、安田善三郎、高倉藤平らと共同し、東京・阪神地方の本県出身の実業家から資本を集め、大正5年12月、資本金30万円で創立したものです(工場は北宇和郡八幡村(現、伊吹町)に建設され、6年3月から開業、釜数は200釜で、当時としては大規模な工場で、大正10年には380釜で県下トップ)。しかし、この南予製糸は製糸同業組合加入の工場から工女の引き抜きを行い、種々問題をおこし、大戦後の大正11年4月13日に徳島県の四国製糸株式会社に合併・併合され、四国製糸株式会社の南予工場となっていました<sup>16)</sup>。そして、具体的事情は不明ですが、この四国製糸南予工場が売りに出され、亀太郎ら地元資本が共同で買収しようという話が持ち上がったようです。日記に「午前十時ヨリ山村君ノ招キニヨリ市内重立チタル製糸家数名ト市役所楼上ニ会シ、四国生糸南予工場ノ買収ニ於テ協議ス。出席者ハ予ノ外桐田、末光、三好ノ諸氏ニシテ、談纏ルニ至ラズ、正午散会。午後予ハ今日出席ヲ見ザリシ、赤松、程野ノ両氏ヲ訪問シテ、

16) 拙稿「大正期愛媛の農業構造(2)」松山大学論集第4巻第3号、1992年8月。



此問題ニ対スル意向ヲ聴キ、更ニ三好、桐田二氏ニモ会ヒテ、夜ニ入レリ。帰途池下君方へ寄りテ、同君及ビ井口君トモ談ジ、十一時頃帰宅ス」(5月15日)とあります。日記中、山村とは山村豊次郎宇和島市長のことです。また、桐田伊四郎、末光寅市、三好威一、赤松晴雄、程野直之助など、宇和島の著名な製糸家が買収の相談をしていたことがわかります。しかし、結局、四国製糸の買収は出来ませんでした。5月17日の日記に「午後一時ヨリ市役所ニテ製糸同業組合第三区支部々内ノ協議会ヲ開ク。……出席者ハ郡部モ多数来リテ、四十余名ニ達シ、有意義ナル会合ナリキ。四時過閉会ノ後、末光、赤松、桐田ノ諸氏ト共ニ居残リテ、四国生糸ノ工場買収ノ懸案ヲ協議シタルガ、結局今回ハ共同ニテ買収スルコトヲ見合せ、自然ノ成行ニ委スコトニ内決セリ」(5月17日)とあります。そして、亀太郎は5月31日に山村市長と協議し、買収打ち切りを決めています。なお、この四国製糸のその後ですが、昭和8年に県外大資本の鐘紡によって買収されています。

5月下旬、春繭の季節になりました。亀太郎は、5月24日に購繭員を集めて、春繭の蚕況視察の打ち合わせを行い、購繭員を各地に派遣しています。また、購繭資金について、5月28日に第五十二銀行、二十九銀行、四国銀行の支店長と相談し、借り入れることを決めています。そして、5月29日以降購繭員を各地に派遣しています。

5月31日に大正15年度(大正15年6月～昭和2年5月)の高島製糸場の決算が行われました。15年度の生糸生産高は2万4,000斤でした。100斤は16貫ですので、3,840貫に当たります。大正13年度の生産高が3,450貫でしたので、規模は変わりませんから、さらに生産性が上がっています。そして、15年度の収支は、不況、金融恐慌にもかかわらず、持ちこたえたようです。日記に「夜、十五年度事業ノ決算概要ヲ調べ、資産負債表ヲ作ル。製糸界多難ノ年ナリシニモ、結局欠損トハナラザル勘定ナリ」とあります(5月31日)。

製糸年度が終わりますと、例年の如く、亀太郎は工女に活動写真を見せています。「職工一同ニ宇和島館ノ活動写真ヲ観サシメタリ」(6月11日)。工女の

慰労と足留め対策のためです。宇和島の製糸家は多く行っています。

さて、6月に入り、高島製糸場は春繭の生繭を次々と購入しています。この時期、繭の受け込みと繭の乾燥で多忙の日々が続きます。繭買いは6月6日までに約3万貫に達しています。しかし、繭は買いすぎたようで、繭置場に困り、6月10日には TENT を張って繭置場にしました程です。

そして、6月12日から昭和2年度の製糸業が始まりました。「本日ヨリ新糸ノ繰糸ヲ開始ス。白ノ十四中ニシテ工女満員ナリ」(6月12日)。この時期、最繁忙で、繭の受け込み、乾燥、製糸、出荷と多忙です。日記に「三井ニテハ新糸成行約定出来ヌ様子ナルヲ以テ、過日来有元商店ヨリノ照会アルマヽ、他ノ輸出商へ交渉中ナリシガ、本日神戸江商へ春白十四中壺萬斤、六月ヨリ十二月渡ニテ最優百五十円高ノ成行約定成立ス」(6月24日)とあります。成行約定とは、契約の際、引渡の時期、品位、数量を定め、値段は引渡の時に定める約定する先物取引です。最優は生糸の格、最優等格で、高島製糸の生糸はその150円高ですので、品位が大変優れていることがわかります。

この間も亀太郎は工場の改善、技術革新を行っています。6月23日には、再繰場の2階屋根に空気穴の円筒8個を取り付け、排湿をよくし、27日に河村式補助給湿器を据え付けています。また、25日には繰糸場に繰糸の回転の調節をはかるため、コンプレッサー二組を設置しています。

また、亀太郎は、生糸の品位を高めるために、10月1日には、セリブレン機を購入し、据え付けています。セリブレン機は生糸の糸条斑をみる検査器です。斑は、一本の糸の繊維中、細かったり、太かったりするムラのことであり、それを検査し、賞罰をつけるために検査器を導入したのでした。

この年、製糸業の不況が続いています。6月以降糸価は悪化を辿ります。12月20日、愛媛県製糸同業組合は八幡浜町で臨時総会を開催し、そこで、来年1月20日より30日間製糸業一斉休業することを決めています<sup>17)</sup>。そして、それをうけ、12月26日、製糸同業組合第3区の支部総会が宇和島市役所で開催され、

17) 『愛媛新報』昭和2年12月24日付け。

製糸業の操短方法について、激しく論議されています。日記に、「午後一時ヨリ愛媛県製糸同業組合第三区支部ノ總會ヲ市役所議事堂ニ開キ、繰短問題ニ就テ協議ス。来会者支部郡部ヲ通ジテ五十余名ニシテ、組合長摂津静雄君ヨリ過般ノ蚕糸中央会總會及ビ県下製糸組合代議員会ノ経過ヲ報告シタル上、予、第三区支部長トシテ議長席ニ就キ、繰短方法ヲ討議ス。一ヵ月間ノ全部休業ト、五ヵ月間ニ割減釜トニ就テ賛否ノ意見相半バシ、頗ル緊張ノ場面ヲ現ジタルガ、結局之ヲ採決シタル結果、全休説多数ヲ占メ、随テ当区モ他ト同様一月二十日ヨリ三十日間一斉ニ休業スルコトニ決定シタリ。依テ之ニ関スル打合せ及ビ県当局ヘ陳情ノ為メ、摂津君、予ノ兩人今夜ノ汽船ニテ上松スルコト、ナリ。四時半散会ス」(12月26日)とあります。

さらに、製糸同業組合は操業休止中の職工の休業手当(賃金の半額)にかんし、手当を支払わないことを県に陳情し、了解を得ています。日記に「午前九時過摂津君ト共ニ高浜ニ上陸シ、十時松山ニ到リテ、……蚕糸課ヲ訪ヒテ、太田課長ト打合ヲナシ、折柄来リ会セル杵田君及ビ田頭技師ヲ加ヘタル四人ニテ、午後一時ヨリ更ニ萬警察部長ヲ訪ヒテ、陳情シタル結果、休繰中ノ職工休業手当ハ、今回ニ限り特殊ノ場合トシテ、支給ヲ要セザルコトニ諒解ヲ得タリ」(12月17日)とあります。製糸不況を亀太郎ら製糸家は女工にしわ寄せしたわけです。

12月29日、亀太郎はこの製糸休業中に新しい製糸工場の建築を思い立ちました。日記に「繭検定所ノ磯崎君来訪。半沈鍋及ビ煮繭機ニ就キテ比較談ヲナス。予テノ腹案タリシ繰糸工場ノ改築ヲ今回ノ繰休期ヲ利用シテ行フコトヲ数日前ヨリ急ニ思立チ、直チニ二、三ノ大工ニ見積ヲナサシメタル結果、本日建物ハ井上勝馬ニ、繰糸機械ハ吉川正一ニ夫々請負ハスコトニ決定シ、其契約ヲナシタリ。工場ハ構内ノ南側ニ東西ノ桁行ニ建テ、矢張り百釜トスル計画ナリ」(12月29日)とあります。

そして、12月31日、亀太郎は1年間の家業を次のように振り返っています。「五月迄ハ財界動揺ノ年ナリシニ拘ラズ無難ニ経過シ来リシガ、六月大イニ期

スル所アリテ、多量ノ春繭ヲ仕入レタルニ、相場ハ予期ニ反シテ順次下落ヲ重ネ、為メニ從來曾テ見ザル損失ヲ招キタルノミナラズ、営業上ニ諸種ノ失費多ク、又家族ニ於テハ仲秋ニ女スミヲ亡ヒテ一段ノ寂莫ヲ加ヘタリ」(12月31日)。昭和2年は多難な年でした。

## 2 昭和3年

昭和3年(1928)は、1月2日より工場の操業開始しています。

この年、亀太郎は、新工場建設のための準備工事を着々と進めています。1月5日に繭置場の移動工事に着手し、1月6日にはYD式半沈繰用繰糸鍋(信州丸子工業発売)110個を注文し、1月8日には繰糸場建築場所の水盛りを行い、9日から座堀に着手しています。

ところで、愛媛県の製糸業は、糸価下落・製糸業不況のため、協定により1月20日から1ヵ月間休業することに決まっていたのですが、その後、約定品製造工場は操業継続を認めるという例外が設けられたため、愛媛県製糸同業組合(組合長摂津静雄)は、1月17日八幡浜で会合し、2割減釜と決めましたが、1月18日再度八幡浜で会合し、先の決議を撤回し、15日休業、1割減釜に変更しています。第3区の支部長亀太郎は、その協議で多忙で、宇和島・八幡浜間を日帰り往復しています。そして、1月20日、亀太郎は第3区の支部長として、組合員を宇和島市役所に招集し、結果を報告しています。日記に「午前業用ヲナシ、午後一時ヨリ市役所議事堂ニ於ケル製糸繰短方法改定ニ関スル協議会ニ出席ス。予、支部長トシテ議事ヲ掌リ、来会者四十余名ヘ最近ノ経過ヲ報告シタル上、満場一致ヲ以テ県組合決定ノ通り、十五日休業一割減釜ノコトニ決シタリ。即チ一月二十日ヨリ二月三日迄(旧正月十二日迄)一斉ニ休業スルコト、シテ、五時前閉会シ、帰宅後、直チニ此由ヲ工場ニ発表ス。吾工場ハ大体本日ニテ繰業ヲ休止シ、残滓ノ分及再繰部ノ整理ノミヲ明日ニ亘リテ作業スル筈ナリ。先日来種々ノ変転ヲ見タル繰短方法ハ遂ニ本日ノ帰結ニ達シテ、比旧正休ミヨリ実行季ニ入ルコト、ナリタリ」(1月20日)とあります。

さて、亀太郎はこの休業期を利用して、新工場の建設工事をさらに進めています。1月21日には、地固め及び地下コンクリート打ちを行い、1月30日には、地上の基礎コンクリート打ちを終え、2月9日に新工場の上棟を行っています。

2月には普通選挙法による初めての衆議院選挙があり（2月20日投票）、亀太郎は政友会の県議として、市議として、政友会候補（二神駿吉）の応援、選挙活動のために、各地を精力的に飛び回り、多忙を極めていました。結果は、全国では、政友会と民政党は互角でしたが、愛媛県では政友会の圧勝でした。

3月以降、亀太郎は再び新工場のための準備を行っています。3月6日には千葉式半沈繰用の煮繭機（千葉商会発売）1台を2,000円で注文しています。3月18日に煮繭場新築のための基礎工事に着手し、4月6日に煮繭場上棟しています（また養成繰糸場も併置し、24坪）。5月2日から繭置場の建築に着手し、8日に水盛り、9日に胴突作業（地盤固め作業）を行い、又、新工場伝動装置の「メタル台」据え付けも行っています。5月9日に千葉式煮繭機が到着しています。5月14日に繭置場上棟しています。5月15日に千葉商会の技術員が煮繭機据付けのため来場し、16日より煮繭機の据付け着手です（23日に完了）。

5月17日に、昭和2年度（昭和2年6月～3年5月）の製糸業が終了しました。旧工場での操業はこの日で終わりました。日記に「昭和二年度ノ製糸本日ヲ以テ済メリ。新糸以後ハ新築工場ノ方ヘ移ル筈ナルヲ以テ、大正四年以後十四年間作業ヲ続ケタル繰糸場ハ茲ニ使命ヲ完フシタルナリ」（5月17日）とあります。そして、5月26日に、昭和2年度の決算が出ました。不況で赤字かと思われましたが、何とか持ちこたえているようです。日記に「前年度ノ決算ヲナシ、資産負債表ヲ作ル。昨年ハ春繭ノミ多量ニ仕入タル結果、一般製糸界ニ比シ当场ノ成績不良ト見ラレシガ、実際ノ勘定尻ハ営業ニテ損失ヲ見ズ。家事費ヲ償フニ足ル程ナレドモ、只新築工場ニ関スル設備費ノ支出額丈ヶ所有金ヲ減ジタル状態ナリ」（5月26日）とあります。

5月下旬から春繭が出回り始めます。亀太郎は、5月26日以降、昭和3年度

の新工場での繰糸のため、購繭員を南宇和郡、東宇和郡や土佐、大分に派遣、春繭を買い入れさせています。

また、新工場の操業の準備も着々と進めています。5月28日に教婦外2名を摂津製糸旭工場に派遣し、YD式索緒法を学びに行かせ、6月1日に汽機、電動機の据替工事をしています。

6月6日に新工場、煮繭場等の設備がほぼ完成し、6月9日に原動機、繰糸機、煮繭機の試運転が行われました。

そして、6月10日から、待望の新工場において、昭和3年度の製糸業が始まりました。日記に「本日ヨリ新繰糸場ニ於テ新糸ノ操業ヲ開始ス。午前六時、予ハ工場ニ出デ、職工一同ニ挨拶ヲナシ、半沈繰糸法ノ趣意ヲ述ベタル後、Y・D式繰糸鍋ヲ使用シテ、製糸ニ着手シタルガ、工女八、九歩ノ充実ニシテ、尚続テ到着シツ、アレバ、一両日ニシテ満釜ニ達スベキ見込ナリ。千葉式煮繭機モ谷岡煮繭手ノ手ニテ始メテ使用シタルガ、相当ノ成績ヲ挙げ得タルガ如シ」(6月10日)とあります。

しかし、新工場の半沈繰糸の操業は芳しくありませんでした。6月14日は「工場ノ繰糸ハ成績甚ダ不良ニシテ、一両日前ヨリ工程三本、二、三歩ノ平均ヲ出デス。解舒意外ニ悪キ為メ、工女ハ皆々半沈繰糸法ニ嫌ラズ、退場者続出シテ收拾ニ困難ノ状態トナレリ」(6月14日)です。15日も同様です。16日も「解舒依然不良ノ為メ、繰糸工女ノ苦情頻出シ、退場者、欠勤者相次グ。連日慰留ニカムレドモ及バズ、現業員一同苦心一方ナラザルモノアリ」(6月16日)といった状態でした。

そこで、亀太郎は、6月17日、日曜日でしたが、検定所の越智教婦に来場を乞い、半沈繰糸の指導を受けたり、摂津製糸旭工場の奥島寿賀夫の来場を乞い、相談に乗ってもらったり、翌18日には、職工の正森ミネに高島製糸場の繭を持たせ、摂津旭工場へ試験に派遣したり、亀太郎自身も半沈繰糸法を導入し成功している桐田製糸、赤松製糸、程野製糸を訪問し、学びに行っています。日記に「正午ヨリ桐田伊四郎君ノ電話ニヨリ同製糸ヲ訪ヒテ、半沈繰糸ノ作業ヲ視

察シ、共ニ所感ヲ談ズ。桐田工場ハ吾工場ヨリ成績宜シ、更ニ同君ト共ニ赤松製糸、程野製糸ヲ訪ヒテ、本年新糸法ヨリ開始セル其半沈繰糸法ヲ視察シタルガ、孰レモ工程六本平均ニシテ、成績ノ挙レルニ感奮ス。吾工場ハ之ニ反シ数日間三本三步平均ヲ出デズ、夜、煮繭機浸透部高温吹込管ノ修理ヲ施シテ十二時ニ到ル」(6月18日)とあります。

6月19日に、亀太郎は半沈繰糸成績不良のため、半沈繰をやめ、沈繰に戻すことを決心し、工場主任、現業員らと相談しました。しかし、現場はあくまで半沈繰を成就しようとの意見でした。日記に「工場依然不良、平均工程二本二歩ニ落込ミ、未曾有ノ不成績ナレバ、大ニ決心スル所アリ。夜、工場主任以下現業員幹部数名ヲ会シテ、沈繰ニ転換方ヲ謀リタルガ、加賀山君、高須賀君、谷岡君等孰レモ半沈法ヲ成就センコトヲ期シ、意気旺ナレバ、其熱心ニ感ジテ暫ク之ヲ継続シ、尚大ニ努力スルコト、ス」(6月19日)とあります。

その後、半沈繰糸成績は少しずつ改善されていきました。「本日工場工程三本三步、夜モ十時過迄鍋煮繰糸ノ試験ヲナシ、煮熟方ニ就キ稍得ル所アリタリ」(6月20日)、「千葉式煮繭機ノ使用法ニ少シク馴レタル為メ、煮熟宜シキヲ得、工程稍進ムニ到レリ」(6月21日)、「本日ノ工場平均ハ四本四歩ナリ」(6月23日)、「三沢君来場シテ、夕刻迄技術ヲ指導ス。工場平均四本五歩」(6月24日)、「繰糸法稍緒ニ就キタル為メ復帰スル工女アリ。新規補充ヲモナシテ、満員トナル。四本六歩」(6月25日)、「夜、現業員ヲ会シテ半沈繰糸法ノ稍順序立チ気分ノ安定セルヲ謝シ、尚技術上ノ打合ヲナス。工程四本八歩」(6月26日)、「終日工場ニアリ。夜、高須賀君ト共ニ蔦屋ニ於ケル三沢君ノ煮繭講話ニ行ク。本日四本九歩」(6月27日)、「工程五本五歩」(6月28日)、「工場用ヲナシ、……五本八歩」(6月29日)、「工程六本」(6月30日)等々とあります。

結局、新工場の繰糸の不成績、何が悪かったのかと言えば、半沈繰の繰糸法ではなく、千葉式煮繭機に欠陥・問題があったのでした。日記に「十一時ヨリ桐田伊四郎君ト共ニ朝日町佐々木製糸場ヘ行キテ、其半沈繰糸及ビ主トシテY・D式煮繭機実地作業ヲ視察ス。同機ノ比較的若煮ナルヲ見テ、大ニ感ズル所

アリ。先日来考慮ヲ重ネ居タル千葉式煮繭機蒸氣高温浸透ノ欠点ヲ一層適切ニ了リ得タレバ、桐田君ト共ニ三沢君ニ此点ヲ詰問スルコト、ス。……桐田君ト共ニ三沢君ニ談ジタルガ、結局同君モ千葉商店外交員タル立場ヲ離レテ所信ヲ披瀝スレバ、蒸氣浸透ハ緒糸ヲ弱クシ、熱湯浸透ハ比較的低温ニテモ、『セリシン』ヲ溶解セシメ易キモノナルコトヲ告白シタリ」(7月18日)とあります。

このように、千葉式煮繭機の蒸氣浸透が緒糸を弱めたことが最大の欠陥であったわけです。そこで、亀太郎は、7月19日千葉式の蒸氣浸透部を廃止して、熱湯浸透装置を設けることを決め、7月20日に熱湯浸透装置の設計を行い、吉川工業所及び岡野ブリキ店に製作を注文しています。また、亀太郎は、蒸氣浸透と鍋煮との比較試験を行い、その結果、鍋煮の方が解舒が良いことを確認しています。「三沢君来場シ、双方立会ノ下ニ鍋使用ノ熱湯浸透ヲ千葉式ノ煮熟部ヘ投入シタル兼用煮繭ヲ試ミタルガ、蒸氣浸透ナキ為メ、糸縷強ク成績良シ」

(7月22日)、「熱湯浸透千葉式煮熟ノ煮繭ハ、千葉式ノ蒸氣浸透ヲ避クル為メ、予ノ考案シタル方法ナルガ、本日モ試験ヲ繰返シテ著シク解除ノ良好トナルコトヲ確メタリ」(7月23日)とあります。

7月31日に、吉川工業所に注文した熱湯浸透装置が納入され、8月1日から煮繭が始まりました。しかし、すぐにはうまくいきませんでした。なお、試行錯誤が続きました。日記に「三沢君ト長時間談ジタル結果、新設ノ浸透部ヲ使用スル代リニ千葉式煮繭機ノ低温部ノ用法ヲ変更シ、蒸氣浸透区ノ真下ヲ二百度以上ノ高温、撒水機真下ヲ百六十度以下ノ低温トシテ、蒸氣区ヲモ併用ノ上、温度ニ急変化ナキ浸透法ヲ試ムルコト、シ、午後四時過ヨリ六時迄之ヲ試験ス。一見若煮ト見エルニ拘ラズ、繰糸ノ成績ハ比較的良好ナルヲ以テ、夜、更ニ三沢君ト意見ヲ交換シタル上、明後日ノ休日明ケニハ工場全部ニ此方法ヲ試ムルコト、ス」(8月4日)、「終日工場ニアリ。煮繭法ヲ研究ス。三沢君モ正午前ヨリ夕方迄立会シタルガ、今回ノ熱度遞減浸透法ハ有望ナルガ如シ」(8月6日)、「煮繭ノ工合良キ割合ニハ工程進マズ、尚研究ヲ要スルヲ覚ユ」(8月8日)等々とあります。



9月16日、亀太郎は千葉式煮繭機の改造を行いました。日記に「本日ノ休日ヲ利用シテ、千葉式煮繭機ノ改造ヲナス。近来余程使ヒ易クナリ居レルヲ、更ニ高温湯部ト低温湯部ノ間ニ、山越及ビ覆蓋ヲ設ケテ、一層完全ナラシメントスルナリ。嚮ニ設ケタル煮熟部ノ吹出管モ成績宜シキガ如シ」(9月16日)とあります。その結果、漸く、煮繭、繰糸共順調にいくようになりました。長い試行錯誤の結果でした。

亀太郎はまた、8月20日に、セリプレン検査(糸条斑の検査)の改良を発表しています。「夕方工女一同ニセリプレン改良ノ必要ヲ談ジ、明日ヨリ織度斑ニ賞罰ヲ付スルコトヲ発表」(8月20日)。そして、21日から実行しています。工女の賃金は、これまで、繰糸高に一定の賃率(10匁につき4銭以上)を掛け、繰糸賃金を算出し、且つ、デニール(織度)の賞罰と糸量の賞罰で加減していたのですが、さらにセリプレン検査による賞罰が加わりました。

10月上旬、秋繭の出回り時期となり、秋繭の買い入れ、乾燥等をなしています。

10月下旬、愛媛県製糸同業組合は、朝鮮蚕業の視察団を組織しました。亀太郎もそれに参加しました。初めての外遊です。参加者は田頭技師、赤松安雄(宇和島)、程野弥七郎(吉田町)、摂津盛徳(卯之町)、横井、浅野、岡、三瀬、萩森の合計10名です。視察状況が日記に詳細に記されています。亀太郎は、10月25日朝7時半宇和島樺崎を出発し、第八鶴島丸で臼杵まで行き、汽車で門司へ行き、関門連絡船で下関へ行き、下関で一同と待ち合わせ、下関から関釜連絡船景福丸にて11時釜山に向かいました。26日の朝8時、船は釜山港に到着し、8時半上陸。10時釜山駅から汽車で、大邱に行き、同地の山十組(650釜)、朝鮮製糸(450釜)、片倉製糸(560釜)を訪問し、工場を視察しています。日記に「各製糸共鮮人女工ノ一斉ニ繰糸ニ従事シ、極メテ静肅従順ナルニハ一同ヲ感服」(10月26日)させたとあります。夜は、同地の県人会、朝鮮銀行支店の坂井氏等五名の招待により、一流の料亭で接待を受けています。27日には、汽車で大田に向かい、同地の郡是製糸の工場を視察しています。28日には、汽

車にて光州に向かい、全南道是製糸株式会社を視察しています。29日には、京畿道の水原にいき、朝鮮総督府の勸業模範場、蚕業試験所、蚕業講習所を視察し、その後、京城に行き、総督府を見学しています。30日には、可部製糸、朝鮮製糸株式会社（250 釜）を見学しています。31日には、仁川を視察し、再び京城に戻り、可部製糸を視察しています。11月1日には平壤に行き、2日にはさらに安東に行き、柞蚕糸工場を視察しています。3日には奉天にまで行っています。4日は市内見学し、撫順に行っています。5日には奉天から大連に帰っています。そして、6日朝9時に大連から大阪商船亞米利加丸に乗り、帰途についています。門司に着いたのが、8日の朝9時。その後、汽車で臼杵に行き、臼杵から船で宇和島に帰っています。宇和島に到着したのが、夜の11時10分でした。半月ほどの旅行でした。

12月31日、亀太郎は昭和3年を次のように、振り返っています。「此年ヲ通ジテ家庭其他ニ異常ナシ。只營業上ニ於テハ購繭ノ方針ヲ誤リ、解舒不良ノ春繭早場物ノミヲ多量ニ買入タル為メ、有利ナル初秋蚕繭ヲ仕入ル、能ハズ。且新糸当時、繰法ヲ半沈ニ変更シタル結果、技術及ビ工場管理上未曾有ノ困難ヲ嘗メタル苦痛ハ、今尚忘ル、能ハザル所ナリ。然リト雖モ作業モ順次其緒ニ就キ、購繭方法モ今後大ニ旧套ヲ脱スルノ計画ヲ立テントスルニ至リタルハ、試練空シカラズト云フベク、翻然覚醒且精進ヲ要スルノ秋ナリ。記シテ以テ後日ノ鑑トス」（12月31日）。

昭和3年は、春繭の過剰買い入れによる失敗とか、新工場を立ち上げたものの、半沈繰で試行錯誤を繰り返し、技術面・管理面で困難を極め、多難な年でした。

### 3 昭和4年

工場は昭和4年（1929）1月3日より操業開始しています。依然不況が続いており<sup>18)</sup> 工女満員で、過剰状態です。「二、三ヶ月前ヨリ工女満員ニシテ、日々

18) 横浜市場での百斤当たり生糸の価格（清算）は、1927年1,369円、28年1,332円、29年

数名ノ過剰ヲ見ル状態ナルガ、近来地方ニ二、三ノ休業製糸ヲ出シタル為メ、益此傾向著シクナレリ」(1月4日)。

宇和島の製糸業の不況は深刻です。宇和島市伊吹町にある安並富太郎経営の安並製糸(50 釜，明治 45 年 3 月創業)が営業不振に陥り，前年の 9，10，11 月の女工への賃金が不払いとなり，未払いのまま 12 月に休業し，訴えられています<sup>19)</sup>。また，安並製糸に続き，弓削製糸や佐々木製糸等も危機に陥り，4 年 1 月には市内だけで 6 工場が閉鎖するなど，危機を深めています。そのため，1 月 10 日には，宇和島の有力製糸家 13 名が丸水楼で会合し，女工の賃金 1 割引き下げを決定するなど，またしても女工にしわよせをしています<sup>20)</sup>。

さて，亀太郎は，この年から購繭方法を変更します。1 月中旬，4 年度からの春繭からの仕入方法について，従来のような購繭員を派遣して入札で繭を仕入れる方法から，養蚕組合との契約によって仕入れることを方針と決め，各地の養蚕組合との協議を始めました。いわゆる特約取引の導入です。

まず，1 月 17 日に，南宇和郡御荘町大字長月部落へ行き，長月養蚕組合と特約取引の協議をしています。「午前八時半ノ中央自動車ニテ，西山正男君ト共ニ御荘へ趣ク。……御荘町大字長月へ到り，同部落ノ養蚕組合長吉良正義氏ニ会ヒテ，豫テノ打合ニヨリ，小学校ニ集合セル養蚕組合員五十名ト会見シ，予ヨリ公正繭取引ニ関スル講話ヲナシタル後，本年春繭ヨリ吾工場ト公正取引ノ予約売買ヲ実行スルコトニ略決定ス。五時頃宿ニ帰り，更ニ城辺下組ノ養蚕組合ヘモ此勧誘ヲ試ムルコト、ナシテ，八時ヨリ城辺ノ組合長宅ヲ訪ヒテ，幹部数名ト会談ス」(1 月 17 日)。

ついで，2 月下旬以降，各地の養蚕組合と特約取引の協議・契約を着々と結んでいます。2 月 24 日には，北宇和郡高光村下光満の養蚕組合に行き，繭公正取引について講話し，特約取引の契約を結び，25 日には，同郡松丸村延野々の

1,190 円。大日本蚕糸会『蚕糸年鑑』昭和 8 年版，184 頁。

19)『資料愛媛労働運動史 第 7 巻』129 頁。

20)『海南新聞』昭和 4 年 1 月 13 日付け，『資料愛媛労働運動史 第 7 巻』141 頁。

養蚕組合に行き、特約取引契約を結んでいます。また、3月14日には、宇和島市伊吹町養蚕組合と、3月28日に、北宇和郡三間村川之内養蚕組合と特約取引の契約を結び、着々と準備をしています。

また、亀太郎は、昭和4年にも引き続き工場の技術革新を進めています。特筆すべきことは、自動索緒機の導入です。亀太郎は2月20日、松井式自動索緒機を購入し、繰糸の技術革新を進めます。日記に「松井式自動索緒機ヲ取付クルコト、シ、先日大阪松井製作所主ト契約シタルガ、今回先ズ四分一前台即二十六釜分ノ取付ヲナスヲ以テ、午後技師一人職工三人来場ス。夕方終業後、直チニ着手シ、徹夜作業ノ上、明朝ノ始業迄ニ完成スル筈ナリ」(2月20日)、「松井式自動索緒機ノ取付ハ午前七時迄ニ二十六釜分全部出来上リタレバ、直チニ使用セシム。故障無ク操作容易ナルガ如シ」(2月21日)とあります。

自動索緒機の繰糸は順調に進みました。そこで、亀太郎は3月、工場全部の釜に自動索緒機を設置することを決め、自動索緒機を松井商会に注文しました。その機械が3月26日に工場に到着し、27日から松井商会の技術員が来て、取り付け始め、3月31日に据付けが完了し、以後、高島製糸は自動索緒機による繰糸になりました。これにより、女工の労働がかなり軽減されました。

3月15日に愛媛県製糸業同業組合の総会が八幡浜町において開かれました。その総会で、亀太郎は第3区の支部長に再任されています。なお、愛媛県の製糸同業組合の組合長は摂津静雄が再任され、また、第1区の支部長は杵田與三郎、第2区の支部長は摂津盛徳で共に再任されています。

さて、養蚕組合との繭特約取引にあたって、製糸側は養蚕農家を事細かく指導するため、養蚕教師を必要とします。亀太郎は、その養蚕教師を4月京都府から雇い、派遣します。長月養蚕組合へは西垣を、光満養蚕組合へは正岡を、中間養蚕組合には松下を、川之内養蚕組合には大滝を、延野々養蚕組合には山崎を派遣しています。

4月22日に養蚕技術員を集め、養蚕指導の打ち合わせをしています。日記に「午前十時ヨリ吾工場ノ養蚕技術員事務打合会ヲ開キ、関係者ヲ会ス。松下、

大滝，山崎(予ノ松山行不在中来任，延野々養蚕組合へ派出ノ人)，正岡ノ諸氏(長月派遣ノ西垣氏ハ掃立前ニテ帰ラズ)ノ外，従来ノ購繭員西山，川野，鳥羽ヲモ会シテ共ニ養蚕指導ノ方針，飼育，上簇ノ改良事項ヲ協議シ，午後六時ニ及ベリ」(4月22日)とあります。

4月23日に鬼北地方各村に霜害劇甚で桑畑に大被害がありました。特約取引の養蚕組合の三間村川之内は被害はありませんでしたが，明治村延野々部落は大被害を受けています。日記に「今朝ノ寒気ニテ鬼北地方各村霜害劇甚トノ報ヲ得タレバ，十二時廿分発ノ列車ニテ急遽松下技術員ヲ派遣ス。予モ宮ノ下駅迄同行シテ引返シタルガ，窓ノ峠附近，宮野下方面ハ被害無キガ如シ。車中ノ人ノ談話ニヨレバ大内駅以東霜害最甚シク，深田，近永ヨリ松丸ニ到ル迄，旭，泉，明治各村ノ桑園ハ全部黒色ニ変ジ居レリトノコトナリ。夜，松下君帰場シタルガ，其視察報告ニヨレバ，当场ノ特約養蚕組合中三間村河之内ハ被害無ク，明治村延野々ハ桑葉全滅，稀ニ見ルノ大霜害ナリトノコトナリ」(4月23日)。

5月1日に昭和3年度の高島製糸場の収支状況が出ました。亀太郎は3年度繭仕入を誤ったのですが，それでも収支は何とか持ちこたえました。日記に「四月末迄ヲ昭和三年ノ製糸年度トシテ業績ヲ考査シ，資産負債表ヲ作ル。此年度中当场トシテハ繭仕入ヲ誤リ，頗ル不遇ノ立場ニアリシモ，昭和二年度ニ工場ヲ改築シテ，資金ヲ減ジタル以後，三年度ノミノ損益ニ於テハ，別段純資金ヲ減少シ居ラザルガ如シ。天寵ヲ感謝シ，五月一日以後ノ刷新健闘ヲ期ス」(5月1日)とあります。

5月28日，昭和3年度の製糸業が終了しました。例年の如く，職工に活動写真を見せています。

さて，5月下旬以降，昭和4年度の，高島製糸場の春繭仕入が始まりました。

4年度からの春繭の買入は養蚕特約組合からの買入が基本です。しかし，繭仕入は，特約取引だけではまだ不足し，乾繭組合からの買入や競争入札も平行して行っています。

6月に入り，次々に繭を買い入れます。6月1日に三浦村，2日に下波結出，

御荘の繭を買い入れます。そして、6月2日までに、直属特約組合、乾繭組合及び新規買い付け合計が2万3,000貫となっています。最終的には、春繭は2万7,874貫の買入となりました(7月14日)。この時期、繭の受け入れ、繭の乾燥等が続き、多忙です。

6月10日より、昭和4年度の新糸操業が始まりました。「本日ヨリ新糸操業ヲ開始ス。朝、予、工場ニ出デ、職工一同ニ挨拶ヲナシ、直チニ作業ニ着手シタルガ、工女釜ヲ超過シ、二十名許リノ過剰ヲ生ズルノ状態ナリ。解舒良好」(6月10日)です。繰糸工程も順調です。「工場モ繰糸工程順調ニシテ、平均約七本半、工女ノ過剰ニ困ム程ナリ」(6月11日)。このように、工女過剰の上に、生産性が上がり、工女がますます過剰になっているようです。

8月中旬、土用繭が出回り始め、繭の買入を行っています。特約組合からの繭、また乾繭組合からの繭の受け入れを行っています。

10月に入り、晩秋蚕の繭が暴騰しました。繭価をめぐる製糸家と養蚕側が対立します。10月15日亀太郎ら製糸家が集まり、繭価対策を協議しています。そこで、繭65掛以上では買わぬことを申し合わせています。掛とは、生糸1貫匁を生産するに要する繭の価格を円で表したものです<sup>21)</sup>。「午後二時ヨリ製糸組合事務所ニ於テ市内製糸家三十余名ヲ会シ、晩秋繭暴騰対策ヲ協議シ、六十五掛以上ハ買ハヌコトヲ決議ス。尚予ハ乾繭組合ヘ行き、右決議ニ基キテ、七十掛ノ相場ヲ支持ナキ様交渉スル所アリタリ」(10月15日)。それに対し、宇和市廳の矢倉技手が新聞に反対を発表し、またそれに対し、亀太郎が反駁の論文を南予時事に掲載するなど、養蚕家と製糸家の対立が続きます。

また、高畠製糸と直属の特約養蚕組合(延野々、川之内、長月、光満等)との間でも繭価格をめぐる対立がおきます。「朝来延野々、川之内組合員多数来場ニ付、工場ヲ観セ、又繭ノ肉眼審査ニ立会セシム。午後長月ヨリ森林君等三

21) 例えば、生糸価格が百斤(16貫)あたり1,400円の場合、原料繭代を含まない生産費(賃金等)が350円とすると、生糸1貫匁を生産するに要する原料繭代は1,400円-350円÷16=65.625円で、繭は65.625掛となる。

名来場。是亦工場ヲ案内シ、繭審査ニ参加セシメ、夫々森田ニテ食事ヲ饗ス」(10月23日)、「是延、西仲繭ノ肉眼審査ニ同組合ノ委員来場、又長月ヨリ下田君来場ニ就キ、右組合繭残部ノ肉眼審査ニ参与セシム」(10月24日)。「午後光満組合委員来リ、肉眼審査ヲ済マセタル上、夕方値段協定会ヲ開キタレドモ、双方ニ懸隔アリテ纏ラズ」(10月27日)。しかし、結局は77〜76・5替で各特約組合と妥協しています。「光満組合ノ繭七七替ニテ漸ク折合ヒ値組成立ス。西山君ヲ山間部各組合ノ値段協定ニ派遣ス」(10月28日)。「西山君ヲ是延、西仲繭組合ニ出張セシメ居タルガ、晩秋繭値段ハ七七替ニテ協定成立ス」(11月4日)。「川之内、延野々ノ晩秋繭値七六・五替ニテ協定ス」(11月7日)。

繭価は高くなっていますが、他方、糸価は安くなっています。「糸価次第二安シ」(11月15日)です。原料高・製品安で製糸家は苦しいようです。そこで、11月19日、製糸家が集まり、女工への賃金切り下げを決議します。日記に「午後一時ヨリ製糸組合事務所ニ市内製糸家ヲ会シテ、賃金一割五分下ゲヲ決議ス」(11月19日)とあります。しわ寄せはまた女工に向けられました。この当時、女工の賃金は普通1日平均90銭程度でしたので、70〜80銭程度となります<sup>22)</sup>

糸価が悪いため、12月15日愛媛県製糸同業組合は、八幡浜で役員会を開き、来年(昭和5年)1月25日から2月15日までの22日間一斉休業し、また、2月16日から5月末日まで2割釜を封印することも決めました<sup>23)</sup>

製糸業休業となると、職工に休業手当(賃金の半額)を支給しなければなりません。しかし、手当を支払うだけの余裕がないということで、製糸同業組合は、愛媛県と警察に了解を求めています。日記に「摂津、杓田両氏ト共ニ蚕糸課ヘ行キ又工場課長ヲ訪ヒテ操短休業手当問題ニ就キ談ジ、更ニ安原警察部長ニ面会シテ陳情スル所アリ」(12月17日)。そして、県も了解しました。賃金のみならず、休業手当も女工にしわよせしました。

亀太郎は、昭和4年を振り返って、年末次のように回顧しています。「営業ハ

22) 『資料愛媛労働運動史 第7巻』218頁。

23) 同上、221頁。

本年ヨリ購繭方針ヲ一変シテ特約養蚕組合トノ公正、正量取引トナシ、技術者ヲ招聘シ、上簇改良ヲ指導シテ繭質ノ向上ヲ計リタルガ、其成績概シテ良好ニシテ糸量ト解舒ノ上ニ進境ヲ見タリ。只晩秋蚕繭ノ不自然ナル高価ト、其後ニ於ケル糸価ノ惨落ニ遭遇シテ悉ク其取得ヲ逸シ去リタルハ遺憾ト云フノ外ナシ。然リト雖内外財界ノ不振ト金解禁ニ直面シ、製糸界最多難ノ年柄ナリシニ拘ラズ、吾工場ノミ尚大過ナキヲ得タルハ、全ク原料政策改善ノ賜ニシテ密ニ欣幸トスル所ナリ」(12月31日)。

このように、昭和4年は製糸界最多難の年で、宇和島の製糸家達が危機に陥っているなかで、高畠製糸のみ大過なく過ごしたのは、亀太郎の手腕、とりわけ、購繭面で特約取引に転じ、それで成功を収めたためでした。

最後に、参考資料として、繭特約取引の売買契約書の1事例(北宇和郡高光村下光満養蚕組合)を掲げておきましょう。

#### 繭売買契約書

今般宇和島市高畠製糸場ト北宇和郡高光村下光満養蚕組合トノ間ニ於テ、別紙連名ノ組合員ノ生産スル成繭ヲ左記各項ニ準ジ、売買契約ヲ締結シ、證書ヲ作製シテ、双方壱通宛保管ス。

#### 左記

第一條 売主ノ生産セル昭和四年度春、秋成繭全部ヲ買主ヘ売渡スコト。

第二條 売主ノ飼育スル蚕種及蚕児掃立時期、蚕種枚数等ハ予メ買主ト協定スルコトヲ要ス。

第三條 売主代表者ハ、各期ノ蚕児掃立前其飼育スベキ蚕種ノ名称、枚数、掃立予定月日、精玉、屑繭生産予定貫数ヲ調査ノ上、買主ヘ通知スルコトヲ要ス。

第四條 本契約ニヨリ成繭ヲ取引スルニ就テハ、春、秋蚕期二回、買主ヨリ飼育及上簇ノ方法ヲ指導スル為メ、無料ヲ以テ養蚕教師壱名ヲ派遣ス。

但シ、養蚕教師ノ宿舍及食費ハ売主ノ負担トス。

第五條 養蚕組合員ハ買主及養蚕教師ノ指示スル改良要項ニ基キテ繭質ノ向上ニ努メ、現品受渡ノ際ハ、買主及ビ組合選出ノ撰繭委員立会ノ上、其協定指示スル



程度ノ撰繭ヲナシタル上、之ヲ行フ。

第六條 繭価ハ附近養蚕組合成繭現金取引値段ノ平均及当時ノ生糸価格ヲ基準トシ、買主及売主代表者ノ双方協定ノ上、之ヲ定ム。

第七條 成繭受渡ノ際、組合員各自ノ成産セル繭参拾貫以内毎ニ、貳百匁ノ割合ヲ以テ試験繭ヲ採取シ、買主ニ於テ試繰ヲナス。

其個人別成績ニヨリ双方協定ノ等級ヲ附シテ組合員ニ繭代金ヲ分配ス。

但シ繭代金ノ総計ハ之ガ為メニ増減セラル、コトナシ。

第八條 繭受渡ハ、買主及ビ組合ト協議ノ上決定セル日時ニ於テ、買主ノ工場ニ於テ之ヲ行フ。

第九條 繭受渡後、買主ハ直チニ推定価格ノ約八割ニ当ル金額ヲ売主ニ支払フ。残余ハ価格決定後直チニ支払ヲナス。

第十條 本契約ノ條件ハ、双方合意ニ上、改計増補スルコトヲ得。

右契約ノ證トシテ契約書互ニ記名調印ス。

要之右ノ取引ヲ行フ趣旨ハ、繭質ノ向上ト取引ノ公正ヲ期シ、両業者ノ共存共栄ノ実ヲ挙グルノ目的ニアルモノナレバ、之ガ実行ニ就テハ互ニ徳義ヲ重ンジ、円満ナル取引ヲ履行スルコトヲ確約スルモノトス。

昭和四年参月貳拾四日

買主 宇和島市伊吹町 高島製糸場主 高島亀太郎

売主 高光村下光満養蚕組合 組合員 名代表者 有元安太郎

組合員連名

有元岩太郎	有元清三郎	有元治太郎	有元 友次	有元 定八	境本堯三次
谷本 菊蔵	谷本 元吉	谷本茂左エ門	有元安太郎	河野熊太郎	伊勢元今次
伊勢元義一	升本重太郎	河野駒次郎	中平巳之吉	中平仙太郎	市川 喜吉
市川惣一郎	菊地 順市	河野 広吉	伊勢元鉄蔵	菊地佐太郎	伊勢元弥太郎
菊地 善吉	河野富士好	渡辺 角衛	市川藤太郎	玉井 ツネ	菊池鉄太郎
有元 光芳	生田 定道	谷本 磯八	松本 宗一	松本亀太郎	松本 太郎
松本 乙松	松本重次郎	松本 千三	有元 義久	松本 長市	市川 モヨ

薬師寺寅太郎 富永 倉市 薬師寺源治郎 薬師寺倉蔵 菊池 倉市 赤松 当  
薬師寺伊之松 河野 真市 菊池 寅市 菊池 米吉 菊池政太郎 梶原 盡市  
兵頭亀太郎 菊池 倉治 有友実太郎 菊池安太郎 菊池 甚松 菊池作太郎  
菊池幸太郎